

義太夫協会会報  
第94号

平成24年1月1日

社団法人 義太夫協会 発行  
〒104-0045 東京都中央区築地  
4-1-1 東劇ビル17F  
Tel 03(3541)5471  
Fax 03(3546)2334  
<http://www.gidayu.or.jp>

# 心を一つに

義太夫協会会長 波多一索

新春を迎え、皆様のご多幸をお祈り申し上げます。  
今年もどうぞよろしくお願い申し上げます。  
まずもって、昨年の東北震災により被災された多くの方々、並びに今なお不自由な生活を余儀なくされておられる方々に心よりお見舞いを申し上げます。

私どももこうした事実遭遇して、さて自分何が出来ると途方に迷いましたが、同時に日本の国、自国の文化の在り方について考えさせられるよい契機になった気がいたします。表面的な形を大切にすることでなく、もう一度それを築いてこられた先人の思い、

考え方、感じ方を心して受け止め直す必要を深く感じております。

今大切なことは、まさにすべての人がそのために自分のもてる力を一つにし、励ましながら生きてゆくことではないでしょうか。

さて当協会の公演も、昨年より国立演芸場、お江戸日本橋亭と会場が隔月変更になり、お客様にご不便をおかけしておりますが、皆様のご協力のおかげでなんとか無事推移することが出来、有り難く存じております。

また、わが国の大切な文化遺産である義太夫を保存普及することを目的として、改めて一般社団法人に認可を戴くべく申請を致して

おりますことをご報告申し上げます。  
本年も皆様のご支援ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

名譽会長	景山正隆	会長	波多一索	副会長	駒之助	常務理事	綾之助 弥乃太夫 越孝	理事	竹本津賀寿 竹本越道 竹本越若 竹本土佐恵 竹本土佐子 竹本素丸 鶴澤寛也 鶴澤駒治 鶴澤友路 豊澤幸治 原佐木道生 佐佐木鍾三郎 池田弘一	監事	
------	------	----	------	-----	-----	------	-------------------	----	--	----	--

### お江戸日本橋亭に女義「のぼり」

今年度より隔月で女流義太夫の定期公演を行っている「お江戸日本橋亭」に、女義の職が登場しました。永谷商事社長、永谷浩司氏のご寄贈です。永谷氏に義太夫や相撲について語っていただきました。

#### 永谷浩司氏・心技体の芸能

義太夫協会相談役でもある氏は長年大相撲とかかわり、日本相撲協会より木戸御免を受け、長年の相撲協会への尽力から10年前には「三賞選考委員」に推挙されました。また、10年以上にわたり、お江戸上野広小路亭での義太夫公演を後援、支援して下さっています。

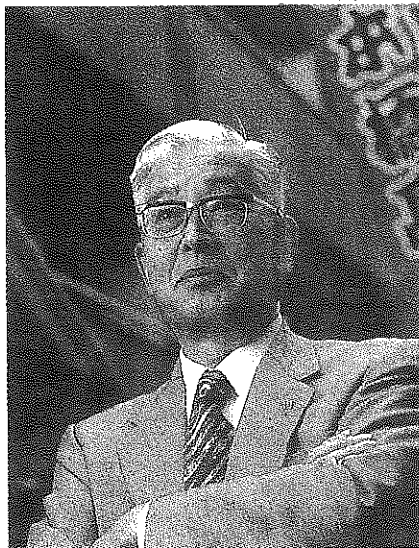
#### 永谷氏に訊く

Q 相撲と義太夫の共通点は？  
永 たくさんある。共に義理人情の世界だし、師弟忠孝の絆が切り離せない。義太夫道は相撲道の基盤、心技体の芸能だと思っただ。その三つが一つになり次第に風格が出て大横綱になる。芸の司と言われる



Q ゆえんだね。  
昨年5月から奇数月の定期公演をお江戸日本橋亭で催させて頂くことになり、永谷女流義太夫同好会として幟を贈って下さいました。ありがとうございます。

永 女義の勢がますます登ってゆくようにね。一日といわず、何日も続けて興行できるよう、他分野の芸人達とも四つに組んで活動してほしい。大いにがんばって下さい。



#### 永谷浩司氏

昭和20年上野ガード下にて手荷物預り所を開業。昭和23年合資会社永谷浩司商店を経て、昭和34年永谷商事株式会社を設立。マンション・ビルの建築、分譲を手掛けるとともに、日本の伝統芸能の分野にも活動を広げ、都内に4箇所を構える演芸場（お江戸上野広小路亭・お江戸日本橋亭・お江戸両国亭・新宿永谷ホール）の席亭でもある。

#### 定期公演報告

昨年の八月の公演で、竹本越里（竹本越道門下）が、初舞台を勤めました。

初舞台当日は、朝から気分が悪くなりそうなど緊張していたという、越里。初めは趣味のつもりだったそうですが、義太夫教室に通う内に、もっと本格的に追究したいという気持ち湧いてきて、プロを目指すようになったとの事です。一年間の見習いを経て、無事に初舞台の日を迎え、「寺入りの段」（菅原伝授手習鑑）を語りました。

義太夫協会のホームページで義太夫教室を知った、というところは、まさに二十一世紀の若者ですが、素顔は古風で、奥床しい日本女性です。

越里という芸名は、師匠の幼名とのこと。今年二月に百歳を迎える師匠の様に、息の長い太夫になるよう、皆様の応援をお願いします。



撮影・福田知弘

## 〈シリーズ人物像〉

(正会員への取材のコーナーです)

## 竹本駒之助 編 第四回

再び春駒のところへ連れ戻されましたが、私の母が心配して、私が米掃除で退屈になったらいけないから(笑)、外へ稽古へ出してください、とお願ひしたのです。そして稽古に連れて行ってくれたのが、若大夫師匠のところでした。

あとは、女流の人が沢山稽古に行っていた団友師匠のところ、そこに天下一品の女流の三味線弾きの小住師匠もいるわけです。小住師匠は東京で修業なさった方ですから、文楽とはちょっと違う弾き方をされました。

本当は私は太夫なので三味線の稽古をしてはいけませんが、今はこんな時代だから舞台だけというわけにはいかないだろう、というので、三味線の稽古もしたわけです。

朝起きたら、仙平師匠のところへ稽古に行きます。玄関を開けて頂いて、師匠が起きられるのを待って、布団をあげて掃除をして、稽古場を整えている間に、師匠は御飯を召し上がります。

その掃除をしている時から注意されるわけです。私がパタパタとハタキをかけて、シャーツと箒で掃除をする。すると師匠は、そのパタパタも息を止めてパタパタしないと埃がひっくり返ってしまう、箒もそんな掃き方したら埃が返りまっせ、箒の先を止めなはれ、撥と同じだと、と。糸の替え方、撥の持ち方

調子の合わせ方など、とても怖かったですよ。三味線を持ってからは、ティンとか、イロとか、そんな弾き方をしたら次が言えるかと。仙平師匠はそういうことに非常に厳しかったです。

小住師匠は、私には手数以外は仰有らなかつたです。そして仙平師匠の所に戻って弾いてみると、それはそれでいいけれど、では語ってごらん、語れるかと。そうこうしているうちに、同じトン、ジャランでも次の文章をどう言うかによって違えているんだな、ということが分かってくるわけです。時々しか言われないからなかなか分からないわけですが、言われないから分からない、そんなことでは駄目なんです。

小住師匠のところでは、団友師匠に語りを教わり、あと若大夫師匠のところへも行かしていただけのようになっていたので、私は三軒行かせていただけになるようになって、退屈はしなくなりました。

若師匠は、ここはハルブシです、長地です、本ブシです、三ツユリです…なんてことはおっしゃいませんから、フシには沢山種類があるはずなのに、私には何だかどのフシも同じように聞こえると、疑問が湧いてくるわけです。例えばオクリでも一間へー、エー、エーって、どうしてエーばかり言うんだらうと。

最初に本読みをしますが、その読み方、言いは非常に勉強になりました。若師匠は文章を綺麗に言うことに関して非常に厳しい師匠でした。文字に濁りがあってはいけません。

残る蕾の…という、「残る」の前に余分に「ン」が付いて「ン残る」になっている、と怒られる。それは、三味線のジャランの後にすぐ語り出してしまふから、息が死んでしまつて「ン残る」となってしまう。それでは駄目だと言われるわけです。

厳しい師匠でしたよ。師匠のところに行く頃には皆大体のことは分かってから行くのですが、それでも皆怒られる。私も何かの時に「下へ行って水かぶって来いーッ、頭冷やせーッ」って怒られたことがあります。

そうしている内に、師匠ご自身で思われたことが何かあったのでしよう、当時最後の文楽の修業をした方は、つばめ大夫(四代越路大夫)だから、自分が頼みに行くから、師事を受けなさいと。お目が見えないのでおかみさんに手を引いてもらって、私のことを頼みに行つて下さったのです。私が十八歳の時でした。

当時、播重はくしゅうという大阪の義太夫の寄席のような所で、義太夫は全部女がやっていたのですが、女であっても皆さん師匠は男の人です。女でも男かと思うような芸をしています。そこに綱大夫師匠など文楽の方々が券を買って聴きに見えていました。三蝶さんでも文楽の人形入りでやっていましたから、男の方でも皆さん聴きに見えていましたよ。そういうものだったんです。そして私のことを越路師匠も御覧になっていてご存じだったわけです。このようにして師匠が私のことを受けて下さり、お世話になるようになりました。

(続く)

ほんに気がメ〜リヤス(十杯目)

鶴澤慎治

昨年夏の夏号はお休みさせて頂きましたので、一年ぶりとなりますが、実にその間には色々なことがございました。

既報の通り、昨年二月五日に綾太夫師が急逝されました。

師とは、NHK邦楽育成会と当協会義太夫教室の年の離れたOBどうし、そして生前の最後の舞台(昨年暮れ京都顔見世の「沼津」千本松原)をご一緒させて頂くというご縁でした。私が義太夫教室を経てこの世界に入る際に、当時の国立養成課の方に橋渡しをして頂いたこと、訪仏公演の際にマルセル・マルソーのパントマイムと一緒に観に行ったことなども、昨日のことのように思い出されます。その師が生前、義太夫教室で受け持っておられた講義で、本行(この場合、歌舞伎義太夫



俊寛銅像と硫黄岳



竹本床から見た屋外舞台

「竹本又は義太夫狂言の側から、本来の人形浄瑠璃の楽曲・演奏を指す言葉」と竹本(義太夫狂言の中で演奏される義太夫節の楽曲・演奏を指す。が、現場では「本行ではこうだけど、芝居ではこう」という言い方が慣用的)との比較をする際に、必ず引き合いに出しておいでだったのが「平家女護島」の「俊寛」でした。

さて、事実上の俊寛が、実際に鹿ヶ谷の陰謀によって流罪となった鹿児島県の硫黄島(※流罪の地については諸説あります)で昨年、当代中村勘三郎丈がその「俊寛」を、大きな話題となった平成八年の上演以来となる再演を果たされました。

という訳で、今回も脱線気味に、その「同行記」ということで進めたいと思います。「唯一の公共交通機関が鹿児島県本土から三日に一度やってくる村営船のみ」「島に四軒ある民宿に相部屋(四畳に二人)でのお泊まり」「コンビニはあり

り」「コンビニはありません。飲物の自動販売機が二台と、小さな雑貨屋さんが二軒」「Docomo以外の携帯は通じません」という事前の説明通りの生活環境、さすが流刑地となっただけのこととはある場所です。しかも舞台は波打ち際の屋外舞台、開演は

夜七時。天候不良のため本番当日に現地入りした勘三郎丈と場当たりをしながらの舞台稽古、緊張の中で迎えた本番、打ち合わせもままならない中、ただただ必死で乗り切ったその最後、幕切の「千鳥」メリでのことでした。

「チン、チリトチン、  
「ザッパーン」(本当の波の音)  
「チチチン、チレトチンリン、  
「ズドンドン」(鳴物さんの浪音)

今回、湿気に負けないようにとにかく裂けない合成皮の楽器を用意して、短期の稽古で仕上げ、粗相のないように、間違えないように、必死でたどり着いた幕切れ、そうした努力というか、苦勞の全てをもってしても、あの「ザッパーン」にはかなわない、そんな気がしました。

思えば去年は、地震、台風など、自然の力の前に、いかに人間が無力であるかを思い知らされた年でもありました。

そんな中、やれチンがどうした、節回しなどがと呑気なことを言っている我々ですが、今回の経験は貴重なものでした。

よろしければこちらもご覧下さい。

URL = <http://heartland.geocities.jp/>

[teitamaland/ioujima.htm](http://teitamaland/ioujima.htm)

YouTube = 「鹿児島県三島村硫黄島の映像」

(続く)

### 平成23年秋の叙勲

竹本綾之助が旭日双光章を受章しました

この度は、御師匠様、大先輩様、朋輩衆の皆様のおかげで、思いもよらぬ事態となり只々驚きと、感謝の念で一杯でございます。義太夫と僕とどっちが大事なんだよとべそをかきながら訴えた次男がお供をしてくれて、会長、副会長、お仲間の方達も伝達式をみとどけて下さり、人生最良の日を経験する事が出来ました。誠にありがとうございました。



撮影・福田知弘

◇初代竹本綾之助没後七〇年特別公演◇

「竹本綾之助物語」明治が求めた

天才少女の栄光と苦悩

紀尾井ホール主催の邦楽ドラマに、当代（四代目）竹本綾之助ほか演奏で参加することになりました。演奏は、野崎村の段・十種香の段ほかです。

主役である初代綾之助には山本陽子、狂言回しとなる樋口一葉には光本幸子の豪華メン

バーです。

日時 3月20日(火・祝) 14:00開演

3月21日(水) 14:00開演・18:30開演

3月22日(木) 14:00開演

会場 紀尾井ホール

演奏 四代目竹本綾之助、竹本土佐恵、竹本綾

一、鶴澤寛也、鶴澤津賀榮、鶴澤駒清

脚本 中川俊宏 演出 大場正昭

全席指定 七、〇〇〇円

チケットのお申込 紀尾井ホールチケットセンター

03-3323710061 (10時~18時/日・祝休)

### ぎだゆう座初春公演

於お江戸両国亭

1月7日(土)

開場 13時  
開演 13時半  
入場料 千五百円

団子売 越京・三寿々 他

触れ太鼓 (財) 日本相撲協会

相撲基句 両国相撲基句会

関取千両幟

猪名川内の段 越孝・駒治他

やぐら太鼓 三寿々

会場にて清酒の振舞いをさせて頂きま  
す。皆様のご来場をお待ち申し上げま  
す。

### 協会の動き

23年7月より  
24年1月まで

7月15日 女流義太夫演奏会

「御所桜堀川夜討」ほか

於日本橋亭

7月22日 教員免許状更新講習

於国立劇場

7月30日 義太夫教室第64期初級閉講式

於豊川稲荷文化会館

8月1・2日 「ぎだゆう座」二日間

於上野広小路亭

8月5・6日 かながわ伝統芸能ワークショップ

於厚木市文化会館

8月13日 外国人のための一日体験教室

於豊川稲荷文化会館

8月20・21日 邦楽ウィークエンド「邦楽解体新書」

於江戸東京博物館

8月27日 一日体験教室

於豊川稲荷文化会館

8月29日 女流義太夫演奏会 若手勉強会

於国立演芸場

8月31日 第9回たつみ会

於上野広小路亭

9月1・2日 「じょぎ」二日間

於豊川稲荷文化会館

9月10日 義太夫教室第64期中級開講

於協会事務所

9月12日 公演部会

- 9月20日 女流義太夫演奏会 「傾城恋飛脚」他 於日本橋亭
- 9月26日 竹本土佐恵の会 於内幸町ホール
- 10月1・2日 「ぎだゆう座」二日間 於上野広小路亭
- 10月7日 日本芸術文化振興基金説明会 於日本青年館
- 10月8日 第九回京の会 於自由学園明日日館
- 10月14日～21日 乙女文楽学校公演出演 於横浜市上白根小学校・三島市南中学校 静岡市梅ヶ島中学校・浜松市曳馬中学校 校・津島市天王中学校 愛西市立田中学校
- 10月24日 女流義太夫演奏会 「狸々」ほか 於国立演芸場
- 11月1・2日 「じょぎ」二日間 於上野広小路亭
- 11月6日 祖先祭 於両国回向
- 11月16日 女流義太夫演奏会 「摂州合邦辻」ほか 於日本橋亭
- 11月30日 編集会議 於協会事務所
- 12月1・2日 「ぎだゆう座」二日間 於上野広小路亭
- 12月3日 第九十五回大日本素義会 於鳥越神社白鳥会館
- 12月10日 青梅市立美術館ミュージアムコンサート 於青梅市立美術館

12月19日 女流義太夫演奏会 障がい者の為の特別公演「仮名手本忠臣蔵」 於国立演芸場  
 1月1日 会報94号発行

〔寄贈〕

竹本連中三味線方 上がり糸  
 西岡政夫様 見台・三味線

〔寄附〕

出月清人様 五万円  
 大日本素義会様 三万円

〔訃報〕

竹本駒龍 平成23年1月19日 99歳で逝去いたしました。  
 明治44年7月20日生  
 出身地・宇都宮の師匠の下で修業  
 昭和4年 上京し竹本越駒に入門  
 昭和6年 浅草東橋亭にて真打披露。以後、5世豊澤猿之助、4世鶴澤綱造、竹本春駒、鶴澤三生、竹本土佐広に師事  
 昭和46年 (社)義太夫協会理事に就任  
 昭和55年 重要無形文化財総合指定保持者認定  
 平成5年 芸団協芸能功労者表彰  
 平成7年1月19日 国立演芸場「新版歌祭文」野崎村の段を最後に、現役から退く。戦争中・子育て期間を除き一貫して舞台上に立ち、美声で多くのファンを魅了し続けました。女流義太夫華やかなりし頃の雰囲気を持った、粹で気さくな師匠でした。ご冥福をお祈り申し上げます。

《今後の予定》

- 1月7日 「ぎだゆう座」初春公演 関取千両幟 団子売 触れ太鼓 相撲甚句 於お江戸両国亭
- 1月14日～3月17日 義太夫教室第64期上級講習 於豊川稲荷文化会館
- 1月20日 女流義太夫演奏会 於日本橋亭
- 2月22日 女流義太夫演奏会 伝承者研修 於国立演芸場
- 3月3日 都民芸術フェスティバル 第42回 邦楽演奏会 「傾城阿波の鳴門」十郎兵衛内の段 第1部 竹本駒之助、鶴澤津賀寿ほか 第2部 竹本土佐恵、鶴澤寛也ほか 於国立小劇場
- 3月10日 義太夫教室OB演奏会 於スペースSF汐留
- 3月20日 女流義太夫演奏会(昼公演) 於日本橋亭
- 4月8日 はなやぐらの会 於紀尾井小ホール

